我が国の人文学・社会科学の国際的な研究成果に関するモニタリング指標の調査分析

実施体制

軽部大(国立大学法人一橋大学)、原泰史(国立大学法人神戸大学)、後藤真(大学共同利用機関法人人間文化研究機構) 、小泉周(国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学)

研究振興局 振興企画課 学術企画室

研究プロジェクトの目的・手法

【目的】

「人文学・社会科学研究の国際性の可視化が重要である」という大学・研究現場等と行政の共通認識に基づき、特に国際ジャーナル論文に関する定量的指標設定の実現可能性について検討を行い、我が国全体の人文学・社会科学分野の総合的・計画的な振興に資する基礎データ・資料を構築・作成することを目的とする。

【政策課題】

「人文学・社会科学の研究成果のモニタリング指標について（とりまとめ）」（令和５年２月７日科学技術・学術審議会学術分科会人文学・社会科学特別委員会）を踏まえ、人文学・社会科学の研究成果を定量的に把握するための指標設定の実現可能性を検討し、実行していく上での具体的な課題及びその解決方策について調査分析を行う。

【研究手法】

① 研究分野別の研究動向・研究文化・研究慣行の調査分析

＜定量的研究アプローチ＞

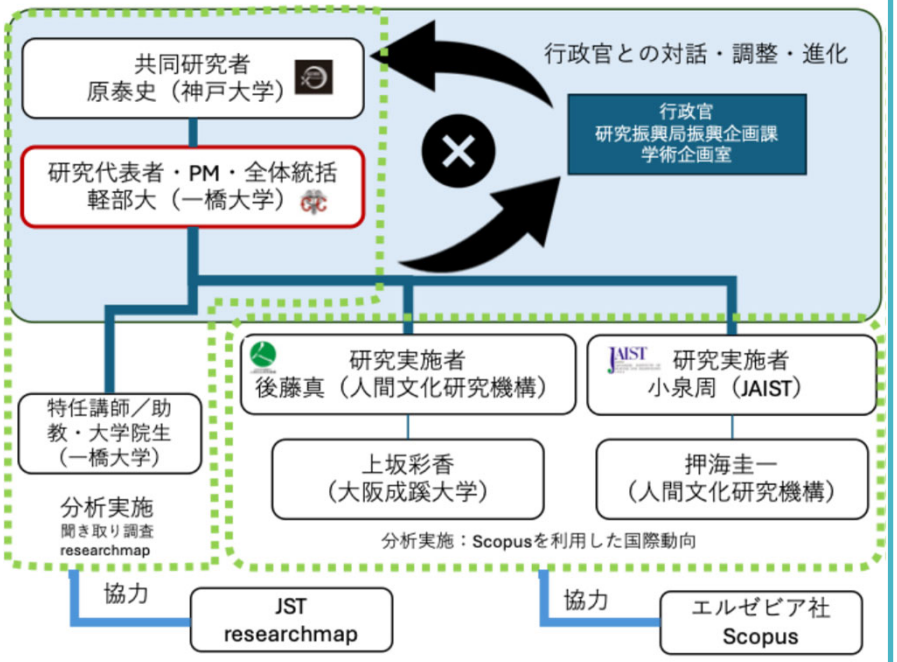
- Scopus/SciVal、researchmapのデータを援用した研究活動の国際化動向の調査分析を実施
- researchmap上の人文学・社会科学分野の研究者約95,000名のデータを対象に調査分析を実施

＜定性的研究アプローチ＞

- 計135名の研究者※を対象に聞き取り調査を実施

※人文学・社会科学系研究領域のうち、科研費中区分レベルで10/10分野、小区分レベルで64/69分野を網羅

② 上記活動を通じたモニタリング指標設定の実現可能性の検討、実行していく上での具体的な課題及びその解決方策に係る調査分析



研究プロジェクトで得られた成果

これまでの研究成果

Scopus・SciVal 等の国際的な書誌情報データベースと、国内の研究者の研究活動を包括的に保持する researchmap を組み合わせた定量分析および研究者への大規模な聞き取り調査を通じて、人文学・社会科学分野の研究成果の実態を多面的に把握した。聞き取り調査は、科研費の審査区分表を基に人文学・社会科学を構成する全分野の研究者にアプローチし、計135名の研究者から協力を得た（表01参照）。また定量的分析には、エルゼビア社のScopusと科学技術振興機構（JST）のresearchmapを活用して、分野別の研究者（約95,000名）の研究業績の動向や、分野別の業績ポートフォリオの動向などを可視化することに成功した（一例：図01参照）。

表01：中区分レベル聞き取り調査協力者数

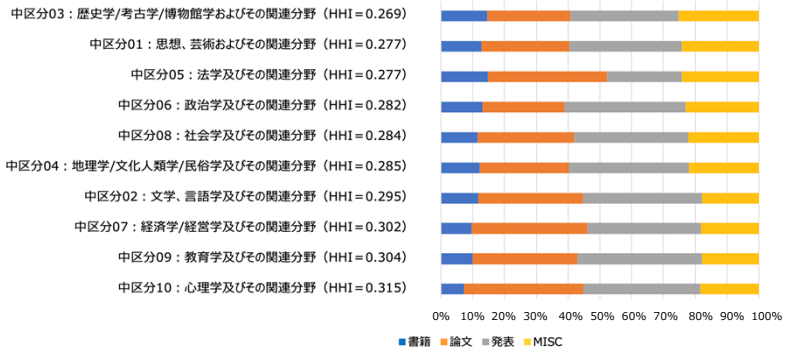
科研費審査区分（中区分レベル）	インタビュー対象研究者数（のべ人数）
中区分1：思想、芸術およびその関連分野	27
中区分2：文学、言語学およびその関連分野	23
中区分3：歴史学、考古学、博物館学およびその関連分野	11
中区分4：地理学、文化人類学、民俗学およびその関連分野	7
中区分5：法学およびその関連分野	7
中区分6：政治学およびその関連分野	5
中区分7：経済学、経営学およびその関連分野	29
中区分8：社会学およびその関連分野	8
中区分9：教育学およびその関連分野	12
中区分10：心理学およびその関連分野	6

※人文学・社会科学系研究領域のうち、科研費中区分レベルで10/10分野、小区分レベルで64/69分野を網羅

主たる発見事実

SciVal等の分析からは、国際誌掲載論文数や国際共著率は分野差を伴いつつ増加傾向にあるものの、論文数シェアでみた日本の人文学・社会科学分野の研究成果の世界的プレゼンスは依然として低水準にとどまることが確認された。また、国内論文や書籍、研究発表等を含む成果公表の構成は分野ごとに大きく異なり、国際論文数指標のみでは、研究活動の全体像を適切に捉えられないことも明らかとなった。国際誌での査読論文公刊が当然視される研究分野と、その評価基準が多様な要素から構成されている研究分野が存在することがその一例である。これらの知見は、分野特性を踏まえた補完的指標の必要性と、今後のモニタリング指標設計に向けた基礎的根拠を提供するものである。

図01：中区分レベル分野別業績ポートフォリオ



主な成果発表実績

Masaru Karube, Yasushi Hara, Yuki Miyazawa, Yu Lei and Riho Tanaka（2025）“Unpacking social impact: Quantifying scholarly and social activities in humanities and social sciences in Japan. ”The Atlanta Conference on Science and Innovation Policy 2025, 14-16, May, 2025, Atlanta, Georgia, USA.

Masaru Karube, Yasushi Hara, Yuki Miyazawa, Yu Lei and Riho Tanaka（2025）“Quantifying scholarly activities, research output and social impact in humanities and social sciences of Japan: A mixed methods study.”RESSH2025 conference of the international association ENRESSH (European Network for Research Evaluation in the Social Science and Humanities), 19-21, May, 2025.

共進化の成果

- 行政官と研究者との間で定期的な対話を行い、それぞれが持つ課題意識を共有することができた。
- researchmapを用いた学術研究は本研究プロジェクトが初の試みであり、行政官と研究者の密な協働による成果である。
- 行政官・研究者の双方が有識者会議における関連議論※を前提としたうえで研究プロジェクトを推進することにより、「人文学・社会科学研究の国際性の可視化が重要である」という共通認識のもと、政策動向・ニーズを踏まえた検討を実施することができた（※「人文学・社会科学の研究成果のモニタリング指標について」（令和５年２月７日 科学技術・学術審議会 学術分科会 人文学・社会科学特別委員会））。
- 本研究プロジェクトの研究成果は、政策検討の基礎資料・データとして、公開予定。